

2021年横浜ナザレン教会聖霊降臨節第二十一主日(10/10)礼拝説教

「共に泊まるキリスト」

ルカ第 24 章 13 節から 35 節

2021/10/10 渡邊洋子

ルカによる福音書 24:13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、**14** この一切の出来事について話し合っていた。**15** 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。**16** しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。**17** イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。**18** その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していなから、この数日そこで起こったことを、あなただけにご存じなかったのですか。」**19** イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。**20** それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。**21** わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。**22** ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、**23** 遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。**24** 仲間の者が何人か墓へ行って見たのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」**25** そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、**26** メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」**27** そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。**28** 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。**29** 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。**30** 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。**31** すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。**32** 二人は、「道で話しとおられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。

**33** そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、**34** 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。**35** 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

## 1 教会を支えたもの

今週も、エマオへの道、エマオでの顕現、等と呼ばれている物語に聴いていきます。先週も少し触れましたが、この美しい物語を持つルカ福音書は、最初は、第二、第三世代の教会に書かれた書物であったと言われていています。教会の人々は、地上の主イエスを目にする事が出来なかった方々であり、ローマ帝国やユダヤ人同胞からの激しい迫害に晒されていました。カタコンベと呼ばれる地下の骸骨の並ぶ真っ暗な墓の中で、小さな灯の中、礼拝していた様子が現代にも伝えられています。激しい試練の中にあつた第二、第三世代のキリスト者を、教会を、支えたものは何なののでしょうか？

それは、「十字架に架かって死んだ主イエス・キリストは、復活し今も生きて働いておられ、キリスト者と共に歩んでくださる」という「神の現実」です。主イエスを実際に見たことのない人々が、復活の主イエス・キリストと出会った、この出会いの経験から来る「確信」が教会を支え、宣教をおし進め世界を変えていきました。古代のキリスト者が霊能者とか霊媒者であり、死人と交信する特殊な能力がある、という訳では勿論ありません。霊媒者が代々の教会の中にいたのかもしれませんが、主流となる事はなかったのです。では代々のキリスト者はどのようにして復活のイエスと出会ったのでしょうか、イエス・キリストを知ったのでしょうか。

聖書の説き明かす「説教」と、主の食卓にあずかる「聖餐」の礼拝を通じて、十字架の死から復活した主イエスと出会い、彼がキリストである事を確信した、と今日のエマオの物語は語っています。説教と聖餐は、見た目は違うけれども、同じ主イエス・キリスト、十字架の死から復活させられ、今も生きておられるイエス・キリストを指し示すものなのです。

## 2 説教、翻訳する

では、聖書のどこに描かれているのでしょうか？一つは、27節「モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」、説教を示す一文です。つまり、この二人は、歴史上はじめて、甦ったイエス・キリストの説教を受けた二人だと言えます。非常に、羨ましい。私もイエスさまが旧約聖書を取り次いだ説教を聞きたかった、とつくづく思います。皆さんもそう思われるでしょう。

しかし、イエスさまが聖書のどこを取り上げ、どういうふうに話されたか？については少しも書かれていません。ただ、ご自身について書かれていることを説明された、とあるのみです。何故なのでしょう。その理由は、この「説明する」と訳されている単語にあるようです。先週も申し上げましたが、この単語には、もともと「翻訳する」という意味があります。つまり、説教は、翻訳と同じ働きがあるのです。イエス・キリストは、外国語のような知らない言葉では、会衆に指し示す事はできません。今、礼拝で聴いている人々が理解できる言葉、頭だけではなく心にも届く言葉に語り直さねばならない。

最近ではコロナ禍で旅に出かける事もめっきり減りましたが、かつては皆さんも見知らぬ地を旅し、その土地の新聞やニュースを見聞きしたことはあると思います。言葉の不十分な外国なら猶更ですが、同じ日本の国内でも旅先のニュースをその土地の住民のように理解する事はできない、自分の街の市長がいきなり IR 法推進する、と言い出した時ほど関心を向け、一体どういう事だ？と身を乗り出して知ろうとする気持ちは起きないでしょう。それは、その土地の新聞やニュースは、数日立ち寄る旅人に向けて書かれてはいるのではなく、その土地に暮らす人々に向けて書かれ語られているからです。住民なら当たり前な事情は省略されていますし、細かい説明も省かれ問題点に焦点を合わせている。旅人が理解できなくて当たり前です。

甦りの主イエス・キリストを指し示す説教の言葉も同じではないかと思えます。復活の主イエスは、聖書の言葉を、他でもないクレオパともう一人の弟子が最もよく判る言葉で語られたのだと思います。だから、ここには「具体的に、主イエスはどんな表現方法で、どのように聖書を語ったか」までは記してはいません。

しかし、繰り返しますが、どのような言葉で語ろうとも、その言葉が指し示す事はただ一つです。「メシア、キリストは、私たち人間の罪を一人肩代わりして償い、私たちを贖い、三日目に甦えられて、父なる御神のみもとに帰られる。この十字架と復活の主を自分の救い主と信じる者は、神との間に平和を得て、主イエス・キリストと同じ復活の命に生きることができる。」イエス・キリストの福音です。教会の礼拝説教は、このイエス・キリストの十字架と復活の福音を繰り返し語り、会衆はこれを繰り返し聴きます。異なる新しい言葉で2000年間、繰り返し語るほどに、イエス・キリストの福音は豊です、自由です。

このクレオパともう一人は、主イエスから「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」(25節から26節)と言われた時、「えっ」と驚きましたが、反発して耳と心を閉ざすことはしませんでした。却って、心を開いたのです。半分眠ったように、神について、主イエス

について鈍くなり、物分かりが悪かった心の目を開きました。それは、主イエスがクレオパ達をよくご存じで深く愛しておられたから。だから、彼らは、この見知らぬ旅人に向けて、心と体を傾けて聴き始めた、のです。神の言葉には、神が深く愛する人々の心に喝を入れるような働きもします。とすれば、「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち」というクレオパ達への叱責の言葉から、既に主イエスの説教、聖書の説き明かしは始まっていたと言っているでしょう。

### 3 聖餐

語っている人が主イエスとは気づかぬうちに、二人の弟子たちは、復活の主イエス・キリストが説き明かす聖書の言葉に夢中になって耳を傾け続けます。やがて、高かった日は傾き、夕暮れに染まるエマオ村が見えてきました。しかし、この素晴らしい話を聞かせてくれる旅人は、エマオ村を素通りして先に行く様子。二人は気が気ではありません。彼らはなんとしても、この話の続きを聴きたいと思った。だから「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めた、のです。主イエスは二人の願いを聞き入れ、共に村に入り、二人の家に泊まることとなります。

そうして一緒の夕飯のテーブルについた時、不思議なことが起こります。客である筈の旅人が、まるで、その家の主人であるがごとく、自然な流れでパンを取り賛美の祈りを天なる御神に献げました。そして、パンを裂いて二人に手渡される、その時、突然、二人は、目の前のお方が十字架で死に、今遺体が見つからない、その主イエス本人である事に気づくのです。あまりの驚きに息をのんだ瞬間、イエスの姿は消えてしまった、とルカは語ります。二人は、何度も主イエスと食卓を共にしており、彼がパンを祝福し、手ずから裂いて弟子たちに渡すことを経験していたでしょう。二人の中では、ガリラヤ地方で5000人に食事を分け与えた記憶が甦ったのかもしれませんが。また、二人は立ち会えませんでした。十一人の使徒達から聞いている話、最後の食卓で、主イエスがパンと葡萄酒を、新しい救いの契約とされた記憶が二人の中に甦ったのかもしれませんが。

パンと葡萄酒を分け与えるように、ご自身を十字架で分け与えてくださった主イエスこそ、甦って今も働いておられる真の救い主だ、聖書は、このお方を指し示している。説教と主の食卓を通じて、二人は、この時、全てを納得したのです。それと同時に、主イエスのお姿は見えなくなります。何とも不思議なことです。しかし、見えなくなっただけで、いなくなったわけではありません。この二人は、もう主の姿が見えなくとも、十字架の主イエスは、復活して

自分達と共にいてくださる、と確信できるようになったから、主はお姿を消されたのでしょ。このように、主の食卓、聖餐も又イエスを指し示すものであり、そして、聖餐は、聖書の取次である説教とよく似た一面を持ちます。

イエスがヨハネから洗礼を受けた直後、まだ宣教活動を始める前、荒れ野で悪魔から誘惑を受けられた。四十日間何も食べられなかった主イエスは空腹を覚える。その時、すかさずサタンは、荒れ野に転がるパンのような石を示し、「神の子なら、この石にパンになるよう命じてみよ」とイエスを試みます。しかし、イエスは『人はパンのみで生きるのではない』と書いてある」と仰って斥けられました。このイエスの言葉は、モーセを通じて神がイスラエルの人々に与えた言葉を引用したもの。先ほど読んだ交読文にあったように、続きはこうであります。「神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」、人は物質的な糧だけで生きるのではない、神の言葉で生きるのだ。私は、説教を通じて、神の言葉を私はあなた方の耳に渡し、心に刻む。あなた方が生きる糧とするように。私は、私の食卓で、聖餐のテーブルで、パンと葡萄酒を、あなた方の為に裂かれた私の体、あなた方の為に流された私の血として、あなた方の手に渡し、心に与える。だから、説教と聖餐は本質的には同じもの。天の御神に聖霊の導きを祈りつつ、説教を聴くように聖餐に与り、聖餐に与るように説教を聴く、これが今、私に与えられた神の言葉として聴く。教会がこの2000年間ささげて来た礼拝です。

#### 4 共に泊まる

では、人間が語る説教を神の言葉として聴き、現実にはパンと葡萄ジュースであるものをイエスのお身体と血とする聖餐に与るには、生きて働くイエス・キリストを知る、経験するには、私たちはどうすればよいのでしょうか。

日本のプロテスタント教会の基を築いた、と言ってよい植村正久牧師は、英国のスポルジョンという19世紀の英国の説教者の言葉を紹介して、エマオ物語について次のように取り次いでいます。

「私たちは、キリストに向かって、自分の魂の鍵を渡そうとしない。他人の家に泊まり、あてがわれた一室に入るとすぐに、その部屋のドア全てに鍵がかけられ、その鍵を家の主人が腰に結び付けて、ひと時も手放そうとしないなら、客はきっと極めて不快な思いをするだろう。しかし、家じゅうの鍵の束を客に与え、『どこにでも遠慮なく出入りしてください』と言われたなら、私たちは安心して快く眠ることができる。私たちのキリストを迎える主人ぶりは、客に鍵を決して与えようとする主人のようではないか。

あなたの靈魂の鍵をすべてキリストに与えなさい、胸にわだかまる心煩い、悶え、憂い、悲しみ、疑惑などあらゆるものを主キリストの前に持ち出すべき

だ。これらのものは、イエスの愛の胸のうちに葬り去るべきではないのか。イエスはこれを決して厭い嫌うことはない。却って、喜んで相談に乗り、必要な処置を示してくださる。二人の弟子が『共に泊まってください』とその家を開け放ったように、いつも包むところなく、すべてをキリストに打ちあけられるようにしなさい。そうすれば、キリスト・イエスは落ち着いて私たちと共に宿り、語り、共に食事をされる。今日の私達は、キリストに向かい、心の中を訴え、語り、問いかけることが非常に少ない。日曜日に一度、わずかに心の一室のみを解放し、普段の生活は、心を固く閉じてはいるのではないか。そんな状態で一体どうして、イエスは私たちの客となり楽しく親しく交わることができるだろうか」

スポルジョンと植村正久、百年以上前の信仰の先輩の言う通り。この言葉を聞いて、自分自身、「主イエスとは関係ない」としていた部分が心の奥にあった事に気づかされ、恥ずかしく思っています。それと同時に、今、気づかせてもらった事に感謝します。

エマオについてこの二人が、主イエスに無理にでも一緒に泊まってください、と懇願したように、私たちも、私たちの心の内の全ての部屋をイエス・キリストに開いて、「どうか、この心に宿ってください」と願う事が、神によって私たちに求められている極めて重要な事ではないでしょうか。綺麗に片付いている客間や応接間ではない、却って心配事や疑い、醜い心が充満している所、他の人にはとても見せられないと思う恥ずかしい部屋にこそキリストに入ってください、その事が復活の主イエスと出会うことに於いて極めて重要なのです。ですが、信頼できない人を部屋に入れることはできないでしょう。だから、主イエスについて、私達は聖書に聴くのです。

## 5 「心が燃える」変えられる私たち

私達が自分自身を主に向けた時、甦りのイエス・キリストは、私たちの魂の隅々まで入ってきてくださり、私たちをとらえ、神のものとしてくれます。復活のイエス・キリストは、私たちの心に火をつけて、私たちを変えます。暗い顔をしていた二人が変えられたように。「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」とある通りです。だからこそ、二人は立ち上がり、背を向けて逃れてきた神の都、エルサレムへと真っ暗な夜の道に戻ることができました。新共同訳では「そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみる」と訳されている33節を原語に忠実に訳せば、「彼らは、時を移さずに立ち上がり、エルサレムへと戻った」です。この「立ち上がる」という言葉は、主イエスが復活された、という時に使われるのと同じ言葉が用いられています。ここで、二人が復活の主イエスの命

の力をいただき、立ち上がる者に変えられた、という事が判ります。それは私達も同じ。私達は、変えられ続けるのです。変化は一度きりではない、神の言葉によって私たちは変えられ続けていきます。そのようにして、キリスト・イエスが今も生きておられることを私たちはこの世へと証し、福音を宣べ伝える者とされていきます。

そんな証人の群れの中に、18世紀のイギリス国教会の司祭でメソジスト運動を起こしたジョン・ウェスレーがいます。彼は、信仰にも伝道にも熱心なキリスト者でしたが、コチコチの戒律主義者でした。そんな若きウェスレーにアメリカ宣教の機会が巡りました。彼は喜んで渡米します。ですが、この宣教は大失敗に終わります。教会から拒絶されたウェスレーは惨めな思いを抱いて英国に戻り、失意の内に暮らします。「何のための伝道なのか？実は自分の心の中にある虚栄心を満足させるためではなかったのか？」そうした声には彼は苦しめられ、自分が何のために生きているのか分からなくなります。

そんなある日の夜、アルダス・ゲートという所で小さな集会があり、ウェスレーも出掛けていきます。重く暗い心を引きずるようにして会場に着くと「われ深き淵より汝を呼べり」というテーマのもとに一人の人がマルティン・ルターの『ローマ人への手紙註解』を読んでいた。その朗読を聞いている時、ウェスレーは実に不思議な体験をします。一体自分の身に何が起きたのか言葉では表現できず、彼は日記にこう記したそうです。「その時、私の心は不思議に燃え立ってきた。私は自分が救われるためにキリストを——ただキリストのみを信じた。キリストが私の罪を取り去り、罪と死の中から救い出してくださったという確信が与えられた。」

ウェスレーは、神から与えられた戒律を厳しく守る事を通じて、気づかぬうちに自分で自分を救おうとしていました。実はその行いは、自分にはキリスト・イエスは不要な者とし、キリストに対して心の扉を固く閉じることでした。そのウェスレーの心が、ルターを通して、集会の朗読者を通じて、明けられた、そして復活のキリスト・イエスが入って来られました。

この時を境に、ウェスレーは変えられます。やがて、彼は、英国国教会の司祭という枠を超えて、英国の貧しい人々に福音を宣べ伝えるようになり、酒と賭博に荒みきっていた多くの労働者の生活を、劇的に変えていく福音宣教運動、メソジスト運動を展開するようになります。

このように甦りのイエス・キリストによって心に火がつけられ変えられた証人はウェスレーだけではありません。数多の人々の足あとが続き、教会の歴史となっています。しかし、そこに見出せる足跡は、証人だけの足あとでしょうか。15節「話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。」証人達の夥しい足あとの傍らには、共に肩を並べて歩いてく

ださり、十字架と復活の福音を指し示す救い主・イエスの足あとが誰よりも大きくしっかりと刻まれています。主イエスはそのように、すべての時代のキリスト者に伴走し、必要なみ言葉を与えて、ご自身の証人としてくださるのです。私達、横浜ナザレン教会も、キリストに火をつけられ心燃やされ、キリストが共に歩んでくださる証人として、この無数の足あとに続いていきたいと願います。